

## 特別講演

座長：天野 俊康（長野赤十字病院）

### 冷えの漢方治療について

#### －当帰四逆加呉茱萸生姜湯、当帰芍薬散、 加味逍遙散、温経湯の処方鑑別を中心に－

東京女子医科大学 東洋医学研究所

木村 容子

西洋医学的に、膠原病や甲状腺機能低下症などの明らかな異常がないにも関わらず、冷えを訴える場合には漢方治療の適応となる。漢方医学では、古くから冷えは「冷え症」として治療対象となっている。『傷寒論』や『金匱要略』では、手足寒・厥寒・厥冷・厥逆、腰中冷、背悪寒など様々な冷えの症候が記載されている。

冷えによって頻尿、腰痛、頭痛、便秘などの身体症状が引き起こされるだけでなく、不眠などの精神的因子への影響も報告されている。このため、冷え症の治療には心身両面からのアプローチが必要である。

漢方治療では、同じ主訴や病名でも体質や随伴症状によって処方が異なる「同病異治」の特徴があるため、冷えを訴える場合も体質や随伴症状によって処方が異なる。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯が有効な冷え症のタイプについて後ろ向きコホート研究を行った。冷え症患者181名(男性9名;女性172名、中央値43歳[範囲 17-79])を対象とし、当帰四逆加呉茱萸生姜湯を服用して1ヶ月後に評価した。冷えは74%の患者で改善した。治療効果予測因子(最適モデル)として、「胃もたれなし」、「抑うつを伴わない」、「下腹部圧痛を認める」が抽出され、判別予測率は84.4%であった。このモデルの外的妥当性を新規患者28名(男性1名;女性27名、42歳[25-75歳])で検証したところ、予測精度は82.1%であった。胃もたれや憂うつ感がみられず、腹診にて下腹部圧痛を認める冷えの患者には、当帰四逆加呉茱萸生姜湯が有効である可能性が示唆された。

このほか、冷えに頻用される当帰芍薬散、加味逍遙散、温経湯などの処方について、どのような症状や所見がある冷えに有効であるのかを解説したいと思う。

#### 冷えの頻用処方の鑑別について

処方	冷えの部位	随伴症状・所見	陰性所見
当帰芍薬散 <sup>1)</sup>	腹部	めまい、 目のかすみ	易怒、耳鳴
当帰四逆加呉 茱萸生姜湯 <sup>2)</sup>	四肢	下腹部圧痛	胃もたれ、 抑うつ感
加味逍遙散 <sup>1)</sup>	四肢(足) (全身なし)	自律神経の乱れ (発作性発汗、不眠)	立ちくらみ
桂枝湯と 麻黄附子細辛湯 併用 <sup>3)</sup>	全身	悪寒又は悪風、 頭痛	下痢
温経湯 <sup>4)</sup>	足 (全身なし)	口唇乾燥	易怒、抑うつ感

<sup>1)</sup> 木村容子ほか. 日東医誌, 2013.

<sup>2)</sup> Kimura Y et al. Kampo Med, 2012.

<sup>3)</sup> 木村容子ほか. 日東医誌, 2010.

<sup>4)</sup> Kimura Y et al. Traditional & Kampo Medicine, 2016.